

作品の講評

㊦ 最優秀賞 「コモモのランタン」

一人暮らしのおばあさんの家に、孫娘のコモモが毎晩、訪ねていくおはなしです。

おばあさんの家は森の湖のほとりにあり、コモモがおばあさんの家を訪ねる場面で「コモモの持つランタンの丸い灯りが窓に映る」など、灯のテーマが活かされたメルヘンチックな描写がととてもよかったです。

また、月のウサギが訪ねてくるというアイデアもファンタジックで、湖のほとりの家、ランタンの灯、月の光、お菓子などの要素が作品の世界を美しくしています。

全体的に文章も丁寧に表現されていて、おはなしの展開も子どもたちに理解できるようにわかりやすく描かれています。

一方、主人公の少女の年齢があいまいで、わざわざ夜の遅い時間に毎日森へ出かけて行くという設定に戸惑いを覚えます。また、普段の二人のやりとりがわからないまま、ウサギの訪問から物語が始まり、普段とちがった出来事が起こるために、「しかし、いつもはこうだ」と後付けでの説明が必要となっており、物語のテンポが少し悪くなっている印象を受けます。

「コモモの持つランタンの丸い灯りが窓に映る」ことが合図であれば、最後にコモモが訪ねてきたときに、その描写がないと物足りないと感じます。「先程」という言葉遣いも気になります。

出来上がった作品でも推敲を重ね、おばあさんのセリフや描写をもっと工夫すれば、さらに魅力的な作品になると思います。

㊦ 優秀賞 「ねこの灯まつり」

ねこたちの灯まつりという設定で、ねこの世界にもお祭りがあるという発想が良かったです。しっぽに赤いリボンの灯を着けて踊るねこたちの楽しそうな様子が目に浮かび、絵がイメージできます。次の場面を想像しながら楽しく読み進めることができました。

後半部分は、灯まつりの説明書きを、ねこたちの踊りの場面の描写に置き換え、ねこらしい様子を描くとおはなしが膨らむと思います。猫と人間が登場するので、混在しないようにわかりやすく描き分けると良いと思います。

㊦ 優秀賞 「街灯おじい」

長年活躍してきた街灯を「街灯おじい」と設定していて、おじいのキャラクターがとてもいい味を出しています。おじいの働きぶりやそのまちで暮らす母と子どもの成長過程が街灯を通して描かれています。親子の時間の流れを街灯がずっと見守っていたのがわかります。

暗闇の道案内に街灯たちが協力して、順番に灯りを灯していく場面は、「灯」が活かされていて、美しい情景が目に浮かびます。

お母さんの小さい時のエピソードも盛り込むとさらに良くなると思いました。

☐ 優秀賞 「マイとミイのあかり屋さん」

ランタンのお店をしている双子の姉妹のおはなしです。おはなしの前半では、お客さんのリスやカラスにぴったりのランタンを選び、選んだランタンの灯がどのようにしてできたのか語られます。他の動物などの協力や虹をすくって作るなど、夢のあるおはなしでした。

主人公が双子の姉妹という設定も親しみが感じられます。ランタンを買いに来るのは動物だけど、双子の姉妹は人間なのだろうか、動物なのだろうか？と読み手がそれぞれ想像を膨らませます。さらに、最後のお客さんは「おひさま」で、おひさまが朝寝坊をするという発想は意外で、面白いと思いました。おひさまは、買ったランタンをどのように持ち帰って、どのように使うのだろうかなどの疑問も残りました。

限られた文字数で、小さい子ども向けのわかりやすいおはなしに仕上げるには、ポイントを絞って描くと良いと思います。

☐ 優秀賞 「小さなチュウくんからの大きなプレゼント」

チーズ作りをしている小さなネズミのチュウくん。小さな夢を胸に森の動物たちの身体も心も温めるチーズ作りに励んでいます。全体的に「灯」のテーマ感が薄いかのように思われたのですが、「灯」は「あたたかい」と多くの人がイメージする中、このおはなしは、チーズがみんなの心を温かくするという発想でした。森の動物たちがチーズを食べてお腹の中から温まっている様子が描かれていて、ほのぼのとした楽しいおはなしでした。文章も読みやすく、子ども達が楽しく読めるおはなしです。

☐ 優秀賞 「ほとけ様が、ふーってした」

誕生日をお祝いする場面からはじまり、実は主人公のおじいさんが和尚さんで、お寺のほとけ様のことにおはなしが展開していきます。描かれる仏壇やほとけ様は、主人公にとってお寺などが日常的で親近感を感じるのだろうなと思いました。日常的でありながらファンタジーの要素もあり、その狭間がおもしろく描かれていました。誕生日ケーキのろうそくをふーっと消す時のわくわく感や火の消え方の描写などが丁寧に描かれています。小さい子どもの主人公が感じるほとけ様への気持ちが可愛く描かれていて、優しさを感じます。

時間軸を整理すると、子どもたちが理解しやすくなると思います。